

# ほっとサイエンス

⑧⑨ 快テク生活

⑩ らくらくIT

Saturday

## 自然

山形県北部の戸沢村は、山へと続く山々が連なり、山あいには棚田が広がる。人口六千人余りの農山村だ。田んぼでは今もメダカが泳ぎ、里山ではギフチョウが舞う。

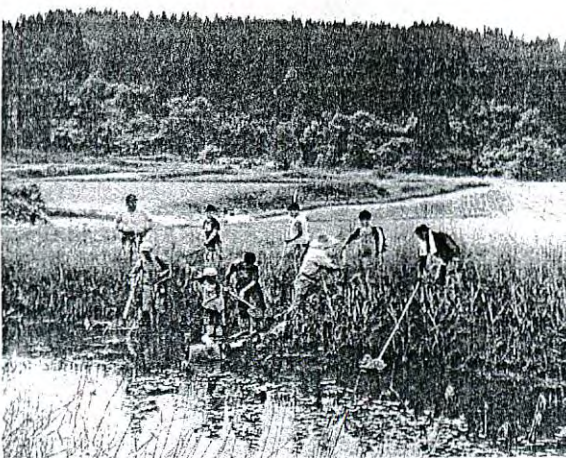
この村で里地里山の保護に取り組み「戸沢里地塾」の主役は地元のお年寄りたち。里地里山に生きる動植物の名前、竹とんぼの作り方、炭焼きの仕方、地元の民話―子供たちに教えることは多い。戸沢里地塾の角川地区の会長を務める斎藤久一さん(71)は

「自然の豊かなさを知らなければ、失われていくことも気付かない」と話す。

今月五日の一ため池の生き物調査には、地元の小学生も網を持って参加した。スジエビやイモリ、フナなど、網を入れるたびに池から生き物が上がってくる。

「エビが身近にいるなんて、知らなかった」と角川小五年の田中良隆君。女子中学生はイモリを見ると驚いて気持ち悪がった。自然と隣り合わせにいても、生き物に触れる機会はずいぶん少なかった。

また自然は豊かさをとめてくれているが、休耕田は増えつつある。田が放棄される、メダカは繁殖しにくくなる。戸沢村では、メダカも住めるよう休耕田に水を引き込み池にしている。



小学生も参加した、ため池の生き物調査(山形県戸沢村で)

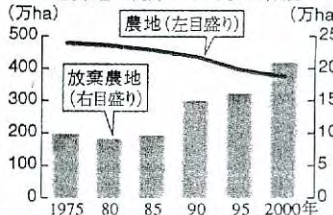
## 「日本の里地里山30」

田んぼや雑木林が広がる里地里山の価値を見直し、保全を目指す活動が全国に広がり始めている。荒廃が進み生息地を追われるメダカやカタクリなどを救い、豊かな里地里山を取り戻す試みが今年新設された「日本の里地里山30」コンテスト(読売新聞社主催、環境省共催)は、各地で先駆的な活動を進める三十団体を選出した。その取り組みを紹介しよう。(三井 誠)

# 豊かな環境 守る活動

### 国内の農地と放棄農地の面積推移

※農水省の統計データをもとに作成



## 環境省も戦略作り

里地里山は、人の手が加えられた田んぼやため池、雑木林などが一体になり、多様性に富む生態系を作り出す。国土の四割を占めるが、まきを取らなくなった雑木林は見捨てられ、ササなどが繁殖してカタクリなど里山の植物を圧倒。農地も宅地開発のほか、効率の悪さから山間部を中心に放棄され、荒廃が進んでいる。その結果、メダカやギフチョウなど里地里山に生きる多くの動植物の絶滅が心配される事

態になった。

政府の「新・生物多様性国家戦略」(2002年)でも、里地里山の荒廃を生き物にとっての危機と位置づけ、環境省は今年度から再生に向けた地域戦略作りを乗り出した。こうした機運を受けて今年行われた「里地里山30」コンテストは、①生物多様性②地域おこし③環境学習―などの基準で、応募のあった百六十一団体から三十団体を選んだ。

都会に引き寄せられがちな若者も、村の魅力を見直し始めた。

山形市内の短大に通う阿部浩樹さん(18)は卒業後、地元で就職し活動を支援するつもりという。今年四月からはホームステイで都会から来る人を受け入れる試みも始めた。里地里山の魅力を武器に過疎

学校の部活動で里地里山を守る取り組みもある。千葉県では、県立茂原農業高、農業士木部の生徒が、学校に近い一宮町の田んぼで汗を流す。退職後、一高町に移り住み農業を始めた亀崎重男さん

## ため池で調査／田んぼの再生

コンテストではこのほか、都市近郊で雑木林の下草刈りなどに取り組む横浜市や東京都町田市のグループなども選出された。コンテストの審査委員を務めた東京農業大の守山弘客員教授は「表彰を受けた活動を一つのモデルに、さらに活動が全国に広がることに期待したい」と話している。

(69)が三年前に購入した田んぼを、協力して再生させている。購入時は荒れ放題だったが、戻っていたヨシを刈り水路を整備。昨年からはコメを収穫できるようになり、サンショウウオなど生き物も戻ってきた。「田んぼはコメ作りだけでなく、生き物をはぐくむことを知った」と、三年生の小高大介部長は話す。

トキが再び舞う田んぼを夢見る新潟県・佐渡島では、地元住民と研究者らが連携して里地里山の手入れをしている。トキは田んぼでドジョウやカワニナを取り、新緑林をねぐらにする「里山の鳥」だ。佐渡トキ保護センターはトキを繁殖させ野生に戻す活動を続けているが、トキが戻った里地里山が荒廃しているのは、また絶滅への道を歩みかねないという思いからだ。